

「薩摩藩宝暦治水」における顕彰活動

山下 幸太郎

はじめに

「薩摩藩宝暦治水」とは宝暦3（1573）年から5年にかけて薩摩藩が行った木曾三川流域の御手伝普請を指す。家老平田鞠負を総奉行として取り組んだこの工事は宝暦5年5月まで行われたが、この工事で薩摩藩には平田含め80余名の犠牲者を出した。現在も、鹿児島と岐阜を中心に様々な顕彰事業が行われており、教育の分野でも使用されるなど地域史の中でも重要な歴史事項の一つであると言えよう。

しかしながら、「薩摩藩宝暦治水」に関する先行研究の多くは、顕彰会や教育会などの特定の組織や個人の著書に依拠しており、いまだ十分に研究されているとは言い難い状況である。これらを踏まえて、本稿では鹿児島の近世史において重要な歴史事項の一つとされる「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動に着目し、顕彰過程を明らかにしていきたい。

上記の課題を明らかにするために、始めに岐阜における顕彰活動について述べていきたい。岐阜は木曾三川流域に位置する地域というだけでなく、「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動の発祥の地であるという点で重要であると考えられる。そして、この岐阜における顕彰活動の重要人物として西田喜兵衛と岩田徳義の二人が挙げられる。二人が顕彰活動を起こすに至った背景から顕彰活動について検討を行っていきたい。

1. 岐阜における顕彰活動

西田と岩田の顕彰活動について検討を行うために、人物像の把握と顕彰活動に着目する必要がある。まずは西田の顕彰活動から見ていくこととしたい。

(1) 西田喜兵衛¹

本稿に関わりを持つ西田喜兵衛は弘化2（1845）年の生まれであり、宝暦期に庄屋を務めていた祖先の西田喜兵衛は桑名藩の桑名郡北部地方の代官職を務めていた。宝暦治水工事の際に

¹ 久保田稔『川と生きる～長良川・揖斐川ものがたり～』風媒社、2008年、(pp93)

は四之手工区の藩士、足軽、下人あわせて二十数名を宿泊させている一方で、その時に書類、図面帳簿などを記していた。これらは代々受け継がれ、「薩摩藩の恩忘るべからず」と言い伝えと共に残されてきたが、11代目西田喜兵衛の時、地租改正に端を發した伊勢暴動の巻き添えに会うことになる。西田の家は明治9（1876）年12月20日に焼かれて貴重な治水工事の記録は焼失してしまい、これを機に顕彰活動を起こすようになり、刊行物および、石碑の建立といった「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動に取り組むことになる。そして大正14（1925）年に亡くなった。

西田の人物像については以上のように、西田家が代官という身分として宝暦治水工事を通して薩摩の人々と交流、接触があり、その記録を代々受け継いできたが伊勢暴動によって焼失してしまう。そしてその後悔の念から、顕彰活動を行うようになったと言える。「薩摩藩宝暦治水」における顕彰活動の始まりは西田であるがそこに至った背景、つまり顕彰活動を起こした動機としては伊勢暴動が関与していると考えられる。そこで伊勢暴動について少し述べてみることにする。

伊勢暴動²は、明治9（1876）年12月に三重、愛知、岐阜、堺4県にまたがって起きた大規模な農民騒動である。地租改正による貢租の平均石代が高価に端を發したこの騒動については、名古屋鎮台の「管下人民暴動鎮圧報告」及三重県の「届書」に次の様に記されている。

十九日に勃發した騒動は、たちまち二〇余か村に及び、旧津藩士族や三重県官員と衝突し、農民三人が死亡し双方に負傷者がでた。伊賀・名張兩郡では凡二〇〇〇人が蜂起した。桑名では士族が暴徒二〇人を斬り、その首を学校の門にさらした。一方士族も死者一〇余人、負傷者多数がでた。三重県では一二〇〇余人の士族が中心となって暴徒に当たった。

二〇日、暴徒は愛知県管下前ヶ須へ侵入したため名古屋鎮台兵は実弾を發砲して退散させた。また津島で五〇〇人余の暴徒が学校・区会所・巡查屯所に放火したがいずれも鎮台兵によって駆逐された。

二一日になって、三重では一志郡一万二・三〇〇〇人、山田に三万人余が屯集した。この日、名古屋鎮台兵二中隊が四日市に出動し、さらに二三日には大阪鎮台大津營所の一中队と、東京警視庁の巡查一〇〇人が到着して嚴戒した。³

このように被害も大きく、関わった組織、人員など規模の大きさが伺える。そして、この伊勢暴動における襲撃の標的となったのは、区会所であり巡查屯所・学校であった。特に学校が狙われた背景としては、当時の村政において多くの地方の豪農宅や学校で執務され、帳簿類が保管されていたことにあると考えられる。

² 岐阜県【岐阜県史 通史編 近代 下】岐阜県、1972年、(pp77~85)

³ 岐阜県【前掲書】(pp78~79)

西田と伊勢暴動との接点、あるいは書類の紛失の経過等は把握し得ないが、前後関係から見ると西田が所有していた宝暦治水工事関係の書類等は伊勢暴動の一連の中で失ったものであり、書類そのものが伊勢暴動の目的として狙われていたわけではないということは留意しておく必要があるだろう。つまり、顕彰活動の背景には偶発的な要素も含まれていたのである。

このような歴史的背景を前提とした上で西田による顕彰活動、すなわち「薩摩藩宝暦治水」における顕彰活動が始まることになる。

予故アリテ宝暦年度薩摩治水工事ニ貢献シ義歿セシ高士ノ為メ先年來同志相謀リテ美濃尾張伊勢ノ三國境界地ナル木曾長良揖斐ノ三大川ノ中堤千本松ニ一大記念碑ヲ建設セリ然ルニ其後高士ノ埋葬シアル寺院發見増加セリ抑モ其由來タル年所ヲ經ルヤ久シ況ヤ其事蹟タル三縣下ニ聯關セシヲ以テ調査上多年ヲ要シ頗ル困難ヲ感セシカ稍ク得タル處ノ資料ト古來傳ハリタル口碑及ヒ高士ノ靈魂ヲ慰メン為メ營ミタル追吊會ノ顛末等ヲ蒐録シテ一部ノ冊子トナセリ之レ聊カ世ノ風教ヲ益シ併テ後世或ハ堙滅若クハ訛傳センコトヲ恐レシ意ニ外ナラズ然レトモ予ヤ不學ニシテ語句ヲ叙ツル能ハス奮ニ其實ヲ誌シテ以テ同好ノ士ニ頒タント欲ス若シ夫レ俗言鄙語ヲ棄テス仍ホ本編ノ遺漏ヲ補フ處アレハ幸甚

明治四十年五月二十五日

三重縣桑名郡多度村大字戸津平農民

西田喜兵衛⁴

これは西田が出版した『濃尾勢三大川宝暦治水誌』の緒言である。この書物は、西田の顕彰活動を始めた動機が記されているだけでなく、宝暦治水工事に関する最初の著作物という点でも特筆すべきである。また、時代が明治40（1907）年という点も注意すべき点であろう。伊勢暴動が明治9年であったことを考えると、顕彰活動を決意してから活字となって公になるまでに30年近くの年月を要していることが分かる。これは後述するが「其事蹟タル三縣下ニ聯關セシヲ以テ調査上多年ヲ要シ頗ル困難」であったことが伺える。この緒言を西田による顕彰活動の動機と位置付けた上で、西田の顕彰活動について具体的に見ていくこととする。

西田の顕彰活動を見ていくためには、『濃尾勢三大川宝暦治水誌』に着目する必要がある。この書物は明治40年に刊行されたものであるが、顕彰過程、つまり明治9年から明治40年に至るまでの活動が上・下の二巻に渡って克明に記されているという点でも注目に値すると言える。本稿ではこの中で緒言にも記されている「千本松ニ一大記念碑」、「追吊會」、「其實ヲ誌シテ」の三つの活動について検討を加えていきたい。

「千本松ニ一大記念碑」については明治33（1900）年4月に油島千本松元洗堰一番猿尾の跡

⁴ 西田喜兵衛『濃尾勢三大川宝暦治水誌・上』緒言、出版社不明、1907年

約550坪の平地に「宝暦治水之碑」として建設され、4月22日に盛大な除幕式が行われた。しかしながら、「宝暦治水之碑」の建立においても伊勢暴動が起きた明治9年から同33年まで実に24年の歳月を要している。この点からも、「其事蹟タル三縣下二聯關セシヲ以テ調査上多年ヲ要シ頗ル困難」といった西田が顕彰活動を行う中での苦労が見て取れる。更には、建碑するための資金不足も課題であった。つまり、西田は事蹟調査と資金という二つの課題を抱えながら建碑を進めていくことになる。

過日ハ遠路御路御歸郷御苦勞存候扱御引合合成ル寶暦年間濃勢尾諸川修繕之諸書附
寫取別冊及御送附候條御落掌相成度此段御引合申進候也
明治二十六年十二月二十九日
島津家記録掛 平田宗高
西田喜兵衛⁵

これは西田の事蹟調査の資料提供に対する島津家の返書である。そしてこのやり取りは松方正義を介して行われていた。西田はこの他にも、事蹟調査として工事で犠牲になった薩摩藩士が祀られている寺について岐阜や三重を中心に対しても同様の資料提供を求めている。鹿児島との遣り取りの中においては、これと同封して「島津家書附寫」、「重年御家譜」などを西田に提供している。史料の授受という点では、一般的なやり取りである。しかしながら、この「島津家書附寫」及び「重年御家譜」に記されている記述は鹿児島県史料の記述と一致する。これらが意味するものについては後述する。

西田はこの事蹟調査と並行して資金面の解決に向けても奔走していた。そして、義捐金や寄付金という形で、政界人とのやり取りを行っていた。当時、中央政界では第二次山県有朋内閣(1898~1900)の頃であり、国会が開設されてから約10年といった時代である。西田は黒田清隆、川村純義、樺山資紀、高崎正風等に対し、顕彰活動に対する協力・理解を募り、このようにして集まった寄付金を記念碑建碑の資金としていた。

事蹟調査と資金の二つに取り組みながら、明治32(1899)年12月に岐阜県知事野村政明宛に「御願」を提出、翌33年3月に「宝暦治水碑建設願及其許可書」⁶という形で正式に認可され、同年4月22日に建碑祭を挙行している。しかしながら、明治33年3月に許可されたにも拘わらず同4月に建碑祭が行われている点や、明治32年と33年に岐阜県知事が交代している点(許可された時の知事は田中貴道)、また建碑祭には行政関係者が多数列席していることから、顕彰活動に第三者による協力が加わっていた可能性を指摘できる。

ここで明治33年4月22日の建碑祭についても触れておきたい。建碑祭は記念碑の一角に京場

⁵ 西田喜兵衛『前掲書』、1907年、(pp27)

⁶ 西田喜兵衛『前掲書』(pp108~109)

を設けて行われた。山県侯爵内閣総理大臣、西郷侯爵内務大臣、島津公爵代理川村伯爵を始め、岐阜・三重の両県知事、逋信省・土木関係、愛知・三重・岐阜三県の高等官、三県貴衆両院議員、三県々會議員、三県來賓一同が參列した中で執り行われた。

宝暦治水碑

内閣総理大臣元帥陸軍大將正二位勲一等功二級侯爵山縣有朋篆額

樞密院書記官長從三位勲二等小牧昌業撰文正五位日下部東作書

尾濃二州之地田野廣衍厥土沃饒有木曾長良揖斐三大川南注入勢海支川交錯或合或分市邑散在其間者俗稱輪中每霖雨水出衆流遞相侵凌輒致漲溢橫決汎濫往々潰田畝漂廬舍民之苦之也久矣宝曆年中幕府命薩摩藩修治之藩侯島津重年遣其家老平田靱負大目附伊集院十藏等赴役以宝曆四年二月起工至五月而止以夏時水長不獲施功也及九月復作翌年五月而畢費藩帑三十萬兩始克告成幕府嘉其功賜重年時服五十襲其余賞賚有差是役也藩士從事者凡六百人地亘十余里畫為四區衆各分任其事靱負為總奉行十藏副之幕府亦遣吏監視修隄防疏溝渠建閘排柵築堰累籠或創設或修補遠近呼應畚鍤相接而其尤致力者為油島防堵大樽築堰蓋油島当木曾揖斐兩川相會處洪流激甚大樽川受長良川地低湍急故施工甚艱隨作隨壞困頓支持迄以有成按當時經營之迹其要在務使諸水各循其道以防侵凌漲溢之憂而其計莫急於斯二者是其所以注全力于此也於是輪中十里之地無復有慘害如往時者民安其業以至今日世稱之曰薩摩工事後來三川分流之策實基于此役已竣總奉行平田靱負俄自刃而斃其他前後自殺者數十人就葬安龍海藏等諸寺事載其過去牒願其致死之由旧記靡得而詳焉土人傳言工事艱鉅出於意料之外功屢敗于垂成以致經費逾額然勢不可中止故寧決死成事而謝專擅增費之罪也想當時士風淳樸人重紀律崇氣義諸子既奉君命就功程不遂則不己苦心焦思之余計不得已以至于此土人所傳當不謬也然則是役事業之偉且艱可以想見而諸子之堅志不撓舍身徇公竟能全其職守以貽澤於後世則可謂古之所稱以死勤事功德加民者矣豈不韙哉爾來百五十年矣居民猶頌薩摩工事而不衰言及死事者則有歔歔泣下者皇治中興百度維新凡興利除害之事次第修舉三川分流之策亦果施行成功将在近茲地人士既感聖世仁澤之洽因念宝曆創始之功又哀致命諸人之義烈不忍使其泯沒莫聞胥謀建石勒其功績以垂永遠來徵余文余不能辭乃為鉉其梗概云

明治三十三年二月

井龜泉刻字⁷

これは、宝暦治水之碑の碑文で、小牧昌業によって書かれたものである。

追吊會は西田が主導して、明治33（1900）年11月26日に第1回追吊會が海藏寺にて行われたのを始まりとし、同37年まで計13回に渡って行われている。この追吊會は、海藏寺だけでなく

⁷ 高橋直服『宝暦治水薩摩義士顕彰百年史』高橋直服先生著書刊行会、1995年。（pp104～105）

常音寺や大黒寺でも行われおり、年に2,3回行われていたことから、場所や時期は特に定めず、個人の意思或は寺の意向を踏まえて行われていたと思われる。そして、「其事ヲ誌シテ」については「濃尾勢三大川宝曆治水誌」を上・下の二冊に渡って刊行している。これは、西田の顕彰活動の過程が詳細に記されており、「薩摩藩宝曆治水」の研究における基礎資料として価値が高いと言えよう。以上は西田が中心となって取り組んだ顕彰活動である。

次に岩田徳義の行った顕彰活動について見ていくこととする。岩田は岐阜における顕彰活動で重要人物として挙げたが、顕彰活動においては、西田と異なった展開を見せる。その差異に着目しながら検討を加えたい。

(2) 岩田徳義⁸

弘化3 (1846) 年に愛知県三河国岡崎の旧藩士に生まれた岩田は、幼少にして父母を失ったために祖父母の手で厳格な家庭教育を受けて育った。一方では藩の儒者、志賀惣堂と曾我耐軒にも教わり、明治10 (1877) 年に愛岐日報社主筆となった。同12年岐阜県に渡って以来、県下民権運動及び自由党の理論的、実践的指導者として活動、また法律研究会等の組織を通じて、広汎な政治的啓蒙活動を行う。当時、最盛期であった自由民権運動の伝統を受け継ぐ貴重な存在として県下自由党中に重きを置いて活動し、また岐阜県自由党と自由党本部を結ぶ重要な役割を担うことになる。同27年に衆議院選挙で落選以来、政治活動から遠ざかっていたが、同31年ごろも教育活動に従事しており、明治末年には東京で麻布学館を経営しながら育英事業に従事していた。

岩田については以上に述べた通り、岐阜での政治活動、特に自由黨員としての活動に積極的だったことが分かる。それ故に、岐阜においては政治家としての影響力が大きいものと推察できる。次に岩田が行った顕彰活動を具体的に見ていくこととする。

岩田の没年は不明であるが、大正年間まで顕彰活動に携わっていたことから、西田と生きた時代がほぼ同じであると考えられる。そして、顕彰活動に携わるようになったのは明治末期に麻布学館を創設してから後の出来事であることから、「薩摩藩宝曆治水」の顕彰活動は西田から岩田という流れで行われていたと言えよう。まずは、岩田が「薩摩藩宝曆治水」の顕彰活動に目を向けるようになった動機から探ることで岩田の顕彰活動について見ていきたい。

義士の事蹟は記念碑建立及吊祭式に於て公になりしとは云へ、然共猶未だ其事蹟を知るもの極めて少くして、遍く之を世人一般に知らしむるに至らず。そは現に吾人の住める東京の首府にして、相逢ふ人毎に此事語れるも、誰一人之を知るものなし。乃ち義士の出身

⁸ 岐阜県「前掲書」岐阜県、1972年、(pp100~101)

地たる薩摩の人々に於てすら、此事を知れるもの殆ど稀なり。然らば全国遂に之を知るものなしと謂ふも可なり。ア、あたらし世にも稀なる忠勇義烈の士の績にして、湮没せることの如きは如何にも遺憾の次第ならずや、依て余は深く之を感慨して止まざると共に、兼て余は先づ自ら教育者の職責として夙に精神教育の主義を擴張せるに付、斯る忠勇義烈に富める志士の事蹟をして世間萬人の上に知らしめたらんには、獨り吾が責任の在る所を盡せるのみならず、是がため大に世道人心に裨益する所あるべきを信じ、偕ころ是迄に有らん限りの微力を盡し、以て或は著作出版に、或は演説に従事し、以て旦夕汲々殆ど寝食を忘るゝまでに勤勞を積み来りし所以なり。是蓋し特に薩摩義士表彰の志のみにあらず、飽迄人をして我國古武士の氣象に立戻らしめて仁義忠孝の念を厚らしめんと欲するものに出づ。而して今此目的を實行すべきがためには、須らく左の三條件に依るべきこととせり。

- 一 義士表彰の請願に及ぶこと
- 二 義士表彰に関する著書出版及演説を為すこと
- 三 義士に関する浄瑠璃演劇を仕組むこと⁹

この史料で、教育者としての職責について触れている点や、武士の精神性を説いている点からも、「薩摩藩宝暦治水」を教育に取り入れることによる効果を顕彰活動に求めていたと言える。そして、この史料の中に岩田の顕彰活動だけでなく、「薩摩藩宝暦治水」全体の顕彰活動の流れにおいて重要となる表現が含まれている。それが「薩摩義士」である。岩田が顕彰活動に携わる以前は、「義没者、自殺者、致命諸士」といった表現が中心であり、宝暦治水工事中での死者に対する認識は死という点では同じであるが、表現が統一される契機となったのは岩田の顕彰活動の中からである。

岩田の顕彰活動を見ていく中で、宝暦治水を義士として捉えるようになった背景、義士化する意義とは一体何だったのであろうか。史料で提示した岩田が顕彰活動を始めた動機から検討を加えることで、実際の活動について述べていくことにする。

前述の三つの項目の中からは義士表彰（授爵）、著書出版、演説、浄瑠璃演劇の四つの意図が読み取れる。薩摩藩宝暦治水の顕彰活動が長きに渡って行われてきたことで、現在ではこれらの事項が大衆的に知られるようになっているが、顕彰活動が始まった当時にとってこのような活動はどのような意味を持ち、それが実際の顕彰活動にどう反映されていったのかといった点に着目しながら、岩田の活動について具体的に見ていくことにしたい。

まずは、平田鞆負の授爵つまり贈位請願について述べることにする。贈位請願は帝国議会の請願委員会の中で取り扱われることになるが、まずはその記事について見ていくことにする。

⁹ 岩田徳義『宝暦治水工事薩摩義士殉節録』麻布学館、1920年、(pp11)

第68 特別報告第82號

第94號

薩摩義士表彰ノ請願 東京市麻布區櫻田町二番地岩田徳義呈出 (紹介議員佐々木文一君)

右請願ノ要旨は宝暦三年幕府カ木曾川治水工事ヲ薩藩ニ課スルヤ薩藩ハ平田鞠負以下ヲシテ之ニ當ラシメタリ然ルニ適洪水氾濫シ且予算額少ク到底其ノ成功期シ難カリシニ拘ラス平田以下ノ諸士ハ予算超過ノ咎ヲ受クルモ斷シテ之カ成功ヲ欲シ而シテ其ノ專斷ノ罪ニ對シテハ正ニ屠腹シテ謝スヘシト議決シ二百萬兩餘ノ用金ヲ大阪ニ調達シテ僅十一箇月間ニ此ノ大難工事ヲ竣工シ後徐ニ屠腹又ハ病没シタリ當時島津家ニテハ幕府ヲ憚リ之ヲ秘密ニ附シタリシモ明治三十三年ニ至リ濃勢兩国有志發起シテ義士記念碑ヲ建設シ始テ其ノ事情ヲ公ケニシタリ惟フニ今日之ヲ表彰シテ其ノ偉功ヲ録シ其ノ氏名ヲ不朽ニ伝フルハ獨リ義士ノ英靈ヲ慰ムルニ止マラス世道人心ニ裨益スル所少カラス依テ右殉難義士八十三名ニ對シ相當ノ表彰アリタシト謂フニ在リテ衆議院ハ其ノ趣旨ヲ至当ナリト認メ之ヲ採択スヘキモノト議決セリ依テ議院法第六十五條ニ依リ別冊及御送付候也¹⁰

これは請願委員会での記録である。大正2(1913)年3月27日付で記録されていることから、議会の場で扱われたのは27日から前後したとしても、同2年3月末に帝国議会の中で扱われているという点には相違ないと考えられる。岩田は大正元(1912)年12月8日に帝国教育會における講演会の中で義士表彰について触れていることから、二年越しで帝国議会まで運んだということが分かる。本文に紹介議員とあり、佐々木文一の名が見えるが、佐々木文一は岐阜出身の衆議院議員であった。つまり、地元の国会議員を介して国会の場に提出したことが分かる。また、帝国議会という政治の場においてこのような経緯を以て実現されたことは、岩田だけでなく宝暦治水の顕彰活動全体から見ても、大きな意義があったのではないかと考えられる。贈位請願においてはこのような過程を経て、同5年12月28日に平田鞠負に従五位を贈位するに至った。

著作出版においては、『薩摩義士殉節録』を刊行している。『薩摩義士録』なども刊行しているが特別に内容を異にするわけではなく、同時期に集中的に出版していることから、西田の後世に残すために記録するといった意図よりは刊行時、つまり大正期の国民に対してのメッセージ性が強いように感じられる。また岩田は執筆活動も行っており、国家主義運動家の内田良平らが中心となって創設した組織「黒龍会」が発行している雑誌『亜細亜時論』¹¹の大正9年(1920)2月号に「薩摩義士の表彰」というタイトルで掲載されている。『亜細亜時論』は大正6年から大正10年まで発行された月刊誌であり、政治機関誌といった意味合いが強いこと

¹⁰『帝国議会衆議院議事速記録27』、東京大学出版会、1981年、(pp323)

¹¹『黒龍会関係資料集8』柏書房、1992年

から、内政や外政について言及した記事が多いというのが同誌の特徴と言える¹²。そしてこの雑誌の中で岩田は他に「王道を通じて一日本の国是に及ぶ」（同年6月号）、「政界革新の急務」（同年9月号）というタイトルで同誌に投稿している。

演説は、東京と鹿児島を中心に行っており、東京では活動拠点である帝国教育會においても講演会を開いている。講演会に関しては鹿児島での実績が多く、鹿児島の顕彰活動とも関連するため後述することとする。

最後に浄瑠璃については、岩田の顕彰活動のみならず「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動全体を見渡す上でも大きな意義を持つと考えられる。それは、近年でも演じられているという継続性や伝承性が示すものではなく、岩田が顕彰活動になぜ浄瑠璃を取り入れたのかという点にあると考えられる。岩田は常々より「赤穂義士」を意識しており、それは岩田が詠んだ短歌にも表れている¹³と言える。

「国民を、救はんものと、薩摩人、其身を木曾の、犠牲にして」

（大黒寺の平田鞠負氏の墓にて）

「山科に、心の奥の、人知れず、世を忍びてぞ、仇をうちける」

（山科の里にて）

これは二首とも大正3年1月に伏見を訪れた際に詠んだ句である。これらを踏まえると、岩田が顕彰活動に取り組む以前は犠牲者に対する表現が不一致であったが、「薩摩藩宝暦治水」の犠牲者を赤穂義士と同じ格、もしくはそれ以上の価値に引き上げるために、義士といった表現や浄瑠璃を作成した可能性が指摘できる。その背景には、やはり当時の世相や社会背景が絡んでいるものと思われるが、ここでは顕彰活動に焦点を絞って論ずるため別稿に譲ることとする。

以上、本章では西田と岩田の顕彰活動について見てきた。顕彰活動の流れを鹿児島に話を移す前に、若干の整理をしておきたい。それは、二人の顕彰活動に対する姿勢から見えてくる。西田は祖先との関わりから顕彰活動を始めたのに対し、岩田は教育者あるいは政治家としての立場から顕彰活動に取り組んでいたことが分かる。これが示唆するものとしては、二人は「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動を行ったという点では一致しているが、顕彰活動のための個人的な繋がりを持っていなかった可能性が高いということである。明治9年から明治後期までは西田が、明治後期から大正までは岩田が「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動の中心人物であったことが明らかになった。表面的には西田から岩田の受け渡しがあったと捉えることもできよう。しかし西田は、宝暦治水工事の時の薩摩藩主島津重年と総奉行の平田鞠負に対して「重年・平田の

¹² 『黒龍会関係資料集1』 柏書房、1992年

¹³ 山田三次郎『岩田徳義翁伝』教育奨励会、1918年、(pp37～38)

授爵」,「千本松締切記念碑付近に神社」を望んでいたが、老齢のため叶わない¹⁴と述べており、また岩田は東京と鹿児島を拠点にした顕彰活動を行っていることから、西田と岩田の顕彰活動は連動して行われたものではなく、夫々が「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動に意義を見出し、行動に移したものと考えられる。

以上が岐阜における顕彰活動として二人の人物を挙げ、それぞれの活動について検討を加えた。活動も多岐に及ぶ一方で、それぞれの意図に沿った顕彰活動が行われていたことが分かる。次に岩田が講演を行うなど、組織との結びつきを強めながら薩摩藩宝暦治水の顕彰活動が発展していった鹿児島における顕彰活動について見ていくこととする。

2. 鹿児島における顕彰活動

本章では、鹿児島における顕彰活動について見ていく。岐阜では個人が中心となって展開されていくのに対し、鹿児島では組織が中心となった顕彰活動が行われていくことになる。現在では両県ともに「薩摩藩宝暦治水」の顕彰事業を行っていることで、顕彰活動において異なる点が見当たらないように思われるが、鹿児島における顕彰活動は西田や岩田の顕彰活動が伝播する形で入ってくることになる。なぜ、宝暦治水工事で80余名の死者を出し、経済的にも藩財政を逼迫させたと言われている鹿児島の地では顕彰活動が行われていなかったのだろうか。鹿児島での顕彰活動を具体的にみていくことで、その理由を明らかにしていきたい。

鹿児島は、鎌倉時代より島津氏が支配しており、以来近代まで領地替えがなかった。幕末維新期、そして明治以降は、西郷、大久保といった中央で活動していた人物にスポットライトが当たる傾向があるが、鹿児島における顕彰活動は当時の鹿児島の社会状況が反映されながら展開されていったと言えよう。

鹿児島における顕彰活動において先駆的な役割を担ったのが、花田仲之助(1860~1945)である。花田は山下町出身の軍人であり、西郷の私学校で学んだ後に上京する。そして、西南の役、日露戦争などに従軍した。報徳会の創始者であり、現在の薩摩義士顕彰会へ繋がる礎を築いた人物として知られている。

花田の業績は報徳会の活動としての実績が大きく、鹿児島にとどまらず全国へと報徳会の活動の輪を広げていくこととなる。そして、その報徳会の活動の一環として「薩摩藩宝暦治水」とのつながりが生まれてくることになる。岐阜での顕彰活動においては、それぞれの思惑が働きながら行われていったのに対し、鹿児島での顕彰活動は報徳会との関連が見られる。では、実際に報徳会がどのような組織で、どのような活動の中で「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動と結びついていったのかを見ていきたい。

¹⁴ 西田喜兵衛「濃尾勢三大川宝暦治水誌・下」, 1907年

1. 報徳会

報徳会¹⁵は花田によって設立された、教化団体である。明治34年に報徳会として正式な活動が始まるが、その目的や組織の概要は報徳会の成立過程を見ていくことで理解できる。

花田仲之助は、明治33年1月に教育勸語を主体とする聖旨実行の会を全国に結成しようとし、有力な教化団体の大同団結を狙い弘道会や勸語普及会などをまとめようと試みるがうまくいかず、足固めとして地元の鹿児島から活動すること決意する。組織の名称からも組織の目的や意図は窺い知ることできるが、当初は報徳会の他にも忠孝会や御勸語会といったものを名称の候補として挙げていた。

蓋し人生誰か恩なからん。吾人の茲に安息し、茲に向上する所以は、一として諸種恩徳の賜ならざるはなし。その恩を知り、その徳に報ゆるは、人道の要義にして、天地の公道なり¹⁶

これは花田の報徳会設立の趣意に当たる部分であり、教育勸語の普及徹底を目的としたことが伺える。そして、花田家親戚報徳会の発足式が明治34年2月11日に行われ、これを以て報徳会の誕生とし、報徳会発足式想談会が会文舎にて明治34年4月7日に行われ、報徳会ではこの日を創立記念日としている。会文舎は、明治に生まれた教育機関であり、鹿児島市内にもこの他に16ほどの学舎が並び、維新後に中央へ進出した鹿児島県出身の多くが何らかの形で学舎と繋がりをもっていた。一方で報徳会はこの後、高麗町、中州、荒田町等、鹿児島市内で広がっていき、明治35年4月5日にこれらを連合する形で鹿児島市報徳会を発足させる。報徳会の活動の目的は、少年修養会、土曜会、日曜会を通した人物養成、青年教育を図るというものであった。報徳会はこのような活動を行う傍らで、花田は報徳会を全国区にしようと奔走する。全国を行脚していくなかでも活動の中心は講演会であり、主な内容も報徳会の主旨や目的を訴えていくことにあり、報徳会を広げようとしていった。

2. 報徳会と宝暦治水

報徳会は教育勸語を主体とする聖旨実行が目的の教化団体であったが、報徳会から顕彰組織へと発展していく過程において、「薩摩藩宝暦治水」とどのような関わりを持っていったのかということは、報徳会の活動の中から見ることができよう。明治44年には鹿児島県下には219の報徳会が存在するほど巨大な組織となっていくが、その活動の目的はあくまでも「教育勸語を主体とする聖旨実行」であった。大正6年、報徳会主催のもとに岩田を招いて講演会を実施している。

¹⁵ 報徳会総務所「報徳会三十五年史」報徳会総務所、1936年

¹⁶ 花田仲之助先生伝記刊行会「花田仲之助先生の生涯」花田仲之助先生伝記刊行会、1958年

この中で岩田は、「薩摩義士の事蹟」というタイトルで「義士表彰の旨意」,「木曾川工事の由来」,「木曾川工事の成功及義士の自殺」といった内容で二時間余りの講演を行った。そして、この際に薩摩義士顕彰会の創設及び、義士記念碑（現在の薩摩義士碑）の建設、毎年祭典を行うとの決定がなされた。そして、顕彰活動としての指針を示されたことで、鹿児島における「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動がスタートすることになる。岩田は、同年4月3日から16日までの間に鹿児島義士祭典式場、第七高等学校、加世田尋常高等学校、伊集院尋常高等学校、隈之城尋常高等学校、加治木尋常高等学校、鹿児島婦人会にて講演を行い、聴衆は行政、教育関係者、学校の生徒などを対象として、全講演で計約5,000人が岩田の講演を聴いていた¹⁷。講演会場、聴衆を考慮しても教育講演会としての意図を感じられるとともに、鹿児島市だけではなく県内各地を回ったことから、世間に宝暦治水の事蹟を伝えるためには意義のある講演会であったと言えよう。そして、この報徳会主催の講演会の際に決議された活動も順次実行へと移ることとなる。義士記念碑は、城山の麓に建立された碑であり大正9年に建立される。これは平田鞠負を中心に治水工事で犠牲になったとされる86名の碑がピラミッド状に建てられたものである。また、義士の祭典については、薩摩義士における行事として捉えられ、5月に行われる慰霊祭等の一連の活動が相当するものと言える。

このように、報徳会の中で岩田が講演会を行ったことで、薩摩義士顕彰会が発足され、活動が展開されていくこととなる。

そして、「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動が固定化されるようになった一つの契機がある。それが鹿児島県教育会への移管である。この変化は単に活動拠点が報徳会から移ったというだけでなく、現在まで繋がる顕彰活動を不変のものとした点において意義が大きいと考えられる。

覚書

- 一、義士祭典 毎年五月二十五日執行の事（太陽暦）
- 一、毎年七月二十五日六月燈執行の事
- 一、平常記念碑に對しての掃除監督等は便宜附近の小學校に御依頼相成候か、其他適宜の方法により行はしむるの事
- 一、今後義士の事蹟調査に關し委員を設けられ度事
- 一、義士に關しての重要書類は複寫して一通を図書館に蔵せられ度事
- 一、以上の他義士の事蹟宣揚に努められ度事¹⁸

そして、覚書と金員・物品の引継をもって大正10（1921）年3月に薩摩義士顕彰会の事業を

¹⁷ 岩田徳義『宝暦治水薩摩義士録』麻布学館、1917年

¹⁸ 鹿児島県教育会『薩摩義士』, (pp97)

鹿児島県教育会に移管する運びとなった。そして、移管された後は覚書に沿った形で顕彰活動が行われた。また、大正14年に行われた総会においては

- 一、宝暦木曾川治水工事の事蹟を國定教科書に掲せられん事を其筋に建議するの件
- 一、全義士記念日を設け、各學校に於て適當なる顕彰の方法を講ずる事¹⁹

この二点が決議され、顕彰会の幹事が文部省に出向くなど積極的に動いていた。つまり、この時期に現在の顕彰活動の骨格が形作られたと言えよう。

以上、鹿児島における顕彰活動について検討を加えた。顕彰活動の歴史は浅いが、活動内容は多岐に渡っており、現在では鹿児島と岐阜が姉妹県盟約を結ぶなどその活動は広がりを見せている。

3. おわりに

本稿では「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動に関して二つの点を指摘できたと考えている。

①顕彰活動の起源及び変遷

薩摩藩宝暦治水における顕彰活動は岐阜から始まったということがわかる。別表にも示した通り、明治33（1900）年に岐阜で宝暦治水碑が建立されたことを始めとして顕彰活動が本格化することになる。そして、鹿児島においては大正6（1917）年に岩田が講演会を開いたことで宝暦治水の事蹟が大衆化されていくことになる。つまり顕彰活動は、岐阜から起こった後に鹿児島に伝わり、大正6年以降に広く知られるようになったと言えよう。一方で、顕彰活動初期の鹿児島側における対応から推察すると、当時「薩摩藩宝暦治水」という歴史事項に対し鹿児島の人々がどの程度認識していたのかという点においては疑問が残る。薩摩藩あるいは島津家が「薩摩藩宝暦治水」に関する史料を一括に管理していたとは考えにくく、性質を異にする史料を集めて「島津家書附寫」及び「重年御家譜」として西田に提出している点などからも、明治期だけではなくそれ以前、つまり宝暦治水工事が行われてから顕彰活動が始まるまでの間に「薩摩藩宝暦治水」に対する理解がどの範囲にまで及んでいたかを明確に記す根拠は乏しい。これは、顕彰活動を行う上で何を基礎史料として用いているのかという問題に直結していると考えられる。

②民から官

鹿児島における顕彰活動は、報徳会から鹿児島県教育会へと活動の主体が移ったことで、官の持つ影響力のもとに広く発信されることになったと考えられる。大正14（1925）年に三重県

¹⁹ 鹿児島県教育会「前掲書」、(pp110)

で薩摩義士忠魂堂建設、岐阜県で治水神社建設する際には教育関係と一般の二つのルートから寄附金を募っており、鹿児島県学務課を送付先として、送付金の額は鹿児島新聞および鹿児島朝日新聞に掲載されるといった流れで行われていた²⁰。寄附金に関する遣り取りからも分かるように、民から官への移行は単に活動主体の変化だけではなく、教育会に顕彰活動の拠点に移ったことで、顕彰会そのものが教育会の内部へと組み込まれていった可能性を指摘できる。

以上の二つの指摘を踏まえた上で本稿における考察から、「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動は岐阜から始まり、鹿児島で知られるようになった後に鹿児島で薩摩義士顕彰会が発足され、教育会への移管を以て現在まで至るといった顕彰活動の過程を解明することができた。「薩摩藩宝暦治水」に関する先行研究は多数見られるが、顕彰活動に触れたものは少ない。本稿で「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動の形成及び変容について指摘できたことで、鹿児島の歴史観が一定の時期に固定されて現在に至っている可能性を提示できたと考えている。「薩摩藩宝暦治水」という歴史事項について、顕彰活動が始まる以前にどの程度の認識を持っていたかという点や、長年に渡り教育の現場において「薩摩藩宝暦治水」が教育資料として使われている点などからも指摘できる。

また今後の課題として、本稿でテーマとした「薩摩藩宝暦治水」について現在広く知られている宝暦治水の話や言説そのものに検討を加える必要が生じたのではないかと考えられる。それは、顕彰活動が一連の流れで行われたものではなく、分散して行われていたものが結合し、それが固定化されて現在に至っているといった背景が「薩摩藩宝暦治水」の顕彰活動において見られたからである。この問題については別の機会に論ずることにして本稿は以上としたい。

²⁰ 鹿児島県教育会「前掲書」、(pp129)

※鹿児島と岐阜における顕彰活動の年表²¹

	鹿児島における顕彰活動	岐阜における顕彰活動
明治33 (1900)		宝暦治水碑建立 小樽川洗堰碑建立
明治35 (1902)		宝暦治水義士之碑建立
大正 6 (1917)	薩摩義士顕彰会発足	
大正 8 (1919)		大黒寺薩摩義士碑建立 (伏見)
大正 9 (1920)	薩摩義士顕彰碑建立	
大正14 (1925)	宝暦治水薩摩義士常夜燈建立	岐阜県薩摩義士顕彰会発足
昭和 3 (1928)		海蔵寺忠魂堂建立 平田鞠負終焉地記念碑建立
昭和 5 (1930)		薩摩堰遺跡記念碑建立
昭和13 (1938)	平田鞠負銅像建立	治水神社建立
昭和29 (1954)	薩摩義士二百年祭実施	宝暦治水二百年祭実施
昭和30 (1955)	薩摩義士遺徳顕彰会発足	
昭和36 (1961)	薩摩義士顕彰会発足	
昭和43 (1968)		薩摩義士顕彰会発足
昭和46 (1971)		鹿児島県と岐阜県の姉妹盟約締結

²¹ 『薩摩義士』 薩摩義士顕彰会 など参照し作成